

〈論文〉

中島健一の地理認識 ——水力社会論を中心に——

田畑 久夫

Geographical Recognition of Kenichi Nakajima:
Based on Hydraulic Civilization Theory

Hisao TABATA

Analysis and review was conducted for the geographical recognition of Kenichi Nakajima, who conducted geographical research from a Marxist perspective. This study was undertaken because the very existence of the academic field of geography is being questioned today. The geographical recognition (methodology) of Kenichi Nakajima is regarded as a turning point in overcoming such questions. In addition to ascertaining the geographical recognition observed in the geographical system asserted by Kenichi Nakajima, the establishment of a hydraulic civilization in a region at the confluence of two rivers (Tigris-Euphrates Basin) was reviewed as a specific example of a regional survey.

1. 問題の所在

中島健一は、地理学に関する非常に多くの著作（中島 1942, 同 1949, 同 1961, 同 1973, 同 1983 など）を第2次世界大戦中から出版し、世にその研究成果を問うてきた。ある面では、現代の地理学なかならず人文地理学の発展に大いに学的寄与してきた研究者である。にもかかわらず、現在ではまったくといってよいほど、中島健一の研究業績が等閑視され続けている。それ故、例えば、近代以降のわが国の代表的な地理学研究者、および地理学研究者間で闘わされた論争を学説史的に詳細に整理・分析した岡田俊裕の著書（岡田 2002）においても、その名前すら登場しない*1。このような意味において、中島健一は「孤高の地理研究者」

とも称すべき存在といえよう*2。かように、中島健一が「孤高の地理学者」といいうるのは、以下に論じる理由などによるものと推察できる。

第1の理由としては、地理学が内包している学問の特徴に強く関連している。すなわち、他の社会科学と称される学問分野においても該当するのであるが、中島健一は、わが国の地理学界をリードしてきた、アカデミー地理学における官学派あるいは正統派と看做される大学*3の地理学科あるいは地理学専攻（専修）出身者ではなかった（岡田 2002: 24-34）。地理学は、その学問的性格上、自然科学および人文・社会科学の両学問分野に研究領域が跨がっている。その中でも、自然科学分野に所属する自然地理学は、物理学、地学などの

他の自然科学と同様に、実験的な作業が必須であり、それを実施する設備を揃えるだけでも多額の費用がかかる。そのため、とくに地理学的研究においては、これらの設備を整えられるのは、地理学科に代表される地理学の独立した学科が開設されている、前述のアカデミー地理学における官学派あるいは正統派と称される特定の大学に限定された。中島健一は、アカデミー地理学に所属する地理学科あるいは地理学専攻（専修）の出身者ではなかった。中島健一は早稲田大学文学部（現文学学術院）出身者であったが、史学科西洋史専攻で、地理学を体系的に学習していなかった*4。そのため、一部の地理学研究者間ではその名前が知られていたが、地理学研究者との交流は多いといえなかった。

第2の理由として、中島健一の唯一の地理学に関する体系的な著作（中島 1949）が、マルクス主義の理論的立場とされる、唯物弁証法あるいは唯物史観と称されている論点から執筆が企画された「新成唯物論全書」の1冊として刊行されたことが指摘できる*5。この事実からも推定できるように、中島健一はマルクス主義的立場を研究方法・手段としてきた。第2次世界大戦中および戦後においては、かような立場を主張することは非常に困難を伴い、とくに当時日本を代表する地理学研究者であった小牧実繁*6、飯本信之、岩田孝三など一部の地理学研究者が地政学（Geopolitik）に賛同した（山口 1943：215-242、岡田 2002：97-105など）ことなどから、マルクス主義的な立場をとる地理学研究者は少なかった。以上述べた2つの理由および、地理学研究者間との交流が少ないことなどから、中島健一は「孤高の地理学研究者」といえる存在であった。

上述したように、中島健一はマルクス主義的な立場から地理学的研究を一貫して継続したが、1942年から1946年にかけての4年間、当時の政策に沿った東亜研究所および民族研究所の所員と

して主として東南アジアの民族学的研究に従事していたことがあった。その両研究所員時代の研究成果も著書（中島 1944）として結実している。西洋史学を専修した中島健一は、当然のことであるが、外国語が得意で、英語、ドイツ語を中心にロシア語もマスターしていた。このように外国語に通じていることなどから、東亜研究所*7および民族研究所*8に所員として就職できたものと推察できる。それ故、英語、ドイツ語、ロシア語など豊富な外国語文献を引用・参照しつつ、論を展開するという点が、中島健一の地理学的研究の大きな特色といえる。そのためか、著書に関しては、書名の一部となっている「古代オリエント」を筆頭に、研究事例の地域をすべて外国に求めている。しかしながら、多くの地理学的研究にみられる如く、フィールドサーヴェイ（field survey）に基づく詳細な事例研究を主体にしたのではなく、多数の文献からの分析・検討が中心となっている。それ故、内容に関しては概略的、全体的な傾向がみられる。とはいうものの、すべての著書は、豊富な文献を引用・参照することで、各々の事象に関して十分な裏付けがなされている。そのため、内容については信憑性が高く、先駆的な研究となっている。

中島健一の著書には、このような研究上の特徴がみられた。本稿では、中島健一の著書に共通する主要な研究視点や観点と看做される地理学に対する思考、すなわち地理認識について検討を行なう。かような検討に際して、中島健一の地理学研究のキーワードの1つである水力社会論*9（The Hydraulic theory of Society）をとりあげ、分析する。水力社会論をとりあげたのは、水力社会論は、中島健一が理論的に大きく依存しているウィットフォーゲル（Wittfogel, K. A.）の主要な研究テーマであるからである。筆者は、ウィットフォーゲルの学問的業績に多大の関心を有し、かかる点について拙論を発表してきた（田畑 2011, 2012, 同

2016a, 同 2016b)。本稿も、これらの拙論と同様、筆者のウィットフォーク研究の一翼を担っている。それ故、水力社会を中心に分析・検討することで中島健一の地理認識を解明することを目的とするものである。

地理認識という述語は、2008年度発表の拙論(田畑 2008:133)以来、度々論文名の一部に使用してきた(田畑 2011, 2012, 同 2012, 同 2014, 同 2016a, 同 2016b)。それ故、本稿において地理認識という述語に関する詳細な説明は避ける。しかしながら、地理認識は、本稿においても前論文同様、論文名の一部ともなっている主要な概念なので、これらの前論文と多少重複するが若干の補足をしておきたい。

認識という述語は日常会話でも度々使用されるほど一般的な用語であるが、専門用語としては主として哲学において使用されている述語である。「哲学では、認識に関して論じること、つまり認識論(epistemology)という形式で使用される。すなわち認識論は、思考の内容から切り離された思考の形式法則を論究する立場」(田畑 2011, 2012 2011:92(3))とされている。それ故、記号(文字など)での表現が可能である真理を探究する方法に関して、その反省的発見を追求する理論といえる。しかしながら、本稿では、このような哲学的な意味で使用するのではなく、認識を文献やフィールドサーヴェイで入手した資料から知り得た成果に基づいて認めるだけでなく、如何にしてその事実を知り得たかという方法的な反省に立って使用する。つまり、地理認識を単に知り得た成果である知識(地理知識)、あるいは文献やフィールドサーヴェイから入手した率直な思考(地理感)とは異なる概念として使用するからである。本稿は、水力社会論を事例として、中島健一の地理認識を確認する作業を中心に論を進めていく。この作業を通して中島健一の地理認識の解明を行なう。

2. 中島健一の地理学の体系

前項で論じた如く、中島健一は西洋史学を専修しているが、書かれた著作にみられるように、学問的関心は地理学であったと推察できる。しかし、数多くの著書の中でも、体系的に地理学に関して論じたものは『地理学』(中島 1949)のみである。『地理学』が刊行されたのが第2次世界大戦後間もない時期だったことがまず注目される。同書は、マルクス主義的立場すなわち唯物弁証法に基づいて体系化された著作である。このような立場を主張する研究——その中に地理学の著作も含まれるのであるが——が第2次世界大戦以前、とりわけ戦争中において出版することが非常に困難である以上に、そのような思想すら公表することが出来ない時代であった。そのような事情から、第2次世界大戦後の民主化が実現すると、堰を切った如く、マルクス主義関係の著作が刊行されだした。中島健一の著書もこの時期に出版された。この時期に出版されたマルクス主義的な立場に基づいた地理学の著作は、管見によれば、中島健一の著書が最初であった*10。以下では、中島健一の『地理学』について検討を加えていく。水力社会論は、上述した地理学的な立場の下で、論が展開していくからである。

『地理学』は次のような構成となっている。

はしがき

序章 地理学批判の方法論

1. 生物と環境
2. 自然と人類社会—とくに、人類社会の発展における労働の役割について—
3. 自然と人類社会—とくに、生産諸力の構造と機能について—
4. いわゆる『東洋的停滞性』について—1つの問題提起—

以上の各章は、すべて書き下しであり、それぞ

れの章末には脱稿した年月日が記入されている。それによると、執筆は1948年5月から1949年3月にかけての約10ヶ月間であった（はしがきは1949年10月）。ただし、各章は序章、第1章……という順ではなく、第2・第3両章が最初で、両章のテーマが同一のことから、これら両章は一気に書きあげられたと推定できる。本章の位置づけに関する序章、主要テーマである第2・第3両章への導入的な役割を示す第1章、およびいわば付章とでも称すべき第4章である。このような構成で論が展開されているので、本稿では第4章を除外して、第3章までを分析・検討の対象とする。

『地理学』の序章の前に置かれているはしがきは、分量的には多くはないが、中島健一の地理学研究を非常に明快に集約的に表現している。はしがきでは、次のように記している*11。

地理学は、本来、総合的知識を取得するものとして、きわめて実践的な意図および役割を学問的使命としてきたと論じ、地理学の学問的性格が実践的な意図・役割であると看做した。しかし、時代が下がり、学問の近代的発展とそれに伴う分化に従って、地理学も、他の学問分野同様、種々の部門に分化すると共に、内容が現実的遊離*12の傾向が顕著にみられるようになった。このような傾向は、近代市民的*13学問（科学）分野にみられる共通した宿命であるといえよう。上述の下線部の現実的遊離を次のように説明している。地理学に対する中島健一の基本的立場なので、少々長文であるが正確を期す意味からもその箇所を示しておく。

かつての近代地理学が提出した、われわれの自然と歴史的社会との合法的発展原理の究明という、歴史哲学にかんするかの根源的な問題に対決しようともせず、さりとて、偉大な歴史の変革の諸過程において、積極的に、われわれの地域社会の生産的实践に寄與するところもな

いのである。

以上述べた傾向がみられる近代市民的科学の一翼を担う西ヨーロッパの近代地理学の潮流を、とくに日本地理学界は素朴に受け入れ、学問体系の中に組み入れた、つまり講壇化したとする。その結果、わが国の地理学は不当な背信を受け、客観的に諸学問分野の侍女となってしまった。以上が地理学の現状認識であり、かような現状を克服しなければならないとする。そのためには、地理学が喪失したことを率直に反省的に自覚しなければならない。この喪失したものは、現実の生産諸力を止揚しうる科学的能力であり、その能力を主体的に把握することである。その把握には「われわれ人類の地域的社会が『自然的なもの』と『歴史社会的なもの』との弁証法的統一過程として、発生・発展・消滅してゆく歴史的現実のプロセスを科学的に暴露し、そのプロセスのなかに、矛盾と合法的発展原理を確認」することである。つまり、地理学を再度、現実直証の視角に置くことからはじめなければならないのである。

以上のことを認識しつつ、これまでの地理学批判の方法論的根拠を生産諸力の具体的実践の中に求め、その過程を抽象化することで、歴史科学の一員としての新たな地理学の体系化を試みるのである。この点こそが、中島健一が強く主張する地理学の体系化である。端的に表現すれば、近代地理学は、その内容が現実遊離的な傾向が著しい。それ故、地理学を現実実証の視角をもつ科学に置き換える必要がある。そして、その根拠として生産諸力の具体的実践の過程の中に求めることを主張しているのである。

序章では、はじめににおいて論じた従来の地理学の問題点を指摘することから論が進む。具体的には、本章のテーマとなっているように、従来の地理学を批判することが論点の中心となっている*14。すなわち、近代までの地理学の歴史を簡

潔に俯瞰する作業を通して新しい地理学の方法を検討した。

現在の地理学は、近代地理学が継承してきた歴史すなわち潮流に関する2つの学問的傾向がみられる。第1の傾向は、何ら統一のない地理知識と単なる地理的事象の記述を特徴とする「記述地理学」である。第2の傾向は、社会的事象を自然的契機から機械論的に推定することを特徴とする「地理的唯物論」である。これら2つの傾向は、「近世におけるかの新興ブルジョアジーの革命的知識・世界観として、きわめて実践的な意図のもとに、現われきたつた」と論じ、かかる傾向の来源を明示している。すなわち、新興ブルジョアジーは、中世を支配してきたスコラ哲学の知識・世界観を放棄することによって、新たに自然条件の中に、上述の知識・世界観の合理化の契機を求めたのであった。

第1の傾向の「記述的地理学」は、最初、古代ギリシア人の実践的目的に役立つ、地域および自然の知識体系を提供した。その後、古代ローマの世界の没落後の社会は、農業経営を基盤とする、自然経済的な封建的な小宇宙である、封鎖的な地域社会へと移行した。このような地域社会においては、他の地域との商業や交通が萎縮した。そのため、それ以降では、西ヨーロッパにおける地理学の発展は、アラビア人に委ねられることになった。また、このことが、ルネッサンスへの有力な契機の1つとなった。

新たな近代地理学は、人種誌学 (Ethnography) と共に、都市経済の興起、世界 (海外) 商業の著しい発展などによって助成され、一方においては、これらの経済機能の実現手段として進展していった。このような近代地理学の進展は、ポルトガル、スペイン、イギリスを筆頭とする先進国であった。これら諸国の商人や旅行家は、職業柄、種々の地理的事実の確認が必要であったが、近代地理学から多大の便宜と利益を得たのであった。そのため、

フランクフルトの商人学校 (Kaufmanns Schule) では、18世紀に実用学科の1つとして商人地理学 (Kaufmanns Geographie) が開講され、その後商業地理学 (Handelsgeographie) と科目名が変更された。この商業地理学が、その後18世紀末にイギリスに伝わり、産業地理学 (Industrial Geography) あるいは経済地理学 (Economic Geography) へと発展した。このような発展がみられたのは、商人が航海したり、交易を行なう各地域での気候、地形、諸民族の風俗や習慣、物産などに関する種々の知識が、新興の商人階級にとっては不可欠の予備知識であったからである。したがって必然的に、このような地理的事象に関する地誌学的な知識が要求されたのである。この地誌学的な素朴な記述的地理学は、今日の地理学界においても、支配的な1つの傾向を示している。すなわち、「地理学は、…… (中略) ……依然として、たんなる地理的記載主義を固執し、地理学自体が当面する根源的な課題に答えようとしない」と強く主張する。

一方、中島健一は、他の有力な傾向と看做する「地理的唯物論」も、「記述的地理学」同様、古代社会において実践的な意図を担うものとして出現する。この学問的特徴は、すべての社会現象を自然的・地理学的契機から究明しようとする思考方法にあった。このような思考方法は、近世初期に一群の哲学者および思想家によって提出されたのであるが、既に述べた如く、新興ブルジョアジーのイデオロギー的現示であった。それは、長い間中世社会を支配してきた階級的ヒエラルヒーの固定に基づく、絶対的主権の尊厳性に対して、新しく自然という概念に置き換えようとするまさに革命的思想といえるものである。このような革命的な思想は、「自然に帰れ」あるいは「自然に進め」というスローガンの下に展開していった。このような経緯から、地理的唯物論は、当時の先進国における新興ブルジョアジーのイデオロギー的性格を担っていたのであった。

以上述べた内容は、多少議論が粗雑となっている恐れが充分あると思われる。そこで、理解を助けるために、その内容を、再度論点について整理しておく。前者の記述的地理学は、商人階級の貿易と交通の指針として、実践的な意図を存していたが、このような役割は急速に衰えていった。

他方、後者の「地理的唯物論」は、歴史哲学に関する根源的な問題を提起した。しかしながら、新興ブルジョアジーという階級的な限界から、自然・社会史的条件を機械論的に類推した。すなわち、「人類経済社会発展諸段階のそれぞれに対応する自然的諸契機の意義の消長＝時限性、および、可変的な労務諸過程とその社会諸関係の偉大な創造的契機をことさらに軽視」したが故に、神秘主義や形而上学的宿命論に陥ることになった。

このようにして、近代地理学は、ブルジョア科学の学問分野と共に発展してきたが、資本制社会機構の崩壊と共に、完全に科学的性格を喪失した。すなわち、このような意味での近代地理学は学問的に大打撃を受けたのであった。この点については、異なる階級つまりプロレタリアートの視角からの厳しい批判が加えられなければならないという^{*15}。その結果、中島健一は、かかる近代地理学に代わる新たな地理学を提唱する。その新しい地理学を人類生態学 (Anthropologie) と名付ける。その特徴は、地域的自然と歴史的社会の静的・解釈的に羅列した並列概念ではなく、動的かつ批判的な概念である。この人類生態学の分析内容および方法は次のようになる。すなわち、第1に、歴史社会の各々の発展段階に対応した自然条件の弁証法的時限性の確認、第2に、生産力の諸要素と生産関係との矛盾に関する媒介契機の実践的な定め²項目である。このような分析内容および方法が確立されれば、「われわれ人類の地域社会がもつ歴史的個性を究明し、それが現象するみかけのうえの素朴な自然的調和から、意識的に、合目的に、より高次の社会的統一への創造的契機と

その革命的意義は確認」できる。そうすれば、人類生態学はよりきわめて実践的な歴史科学の一翼を担うことができる^{*16}。

次いで、上述した地域的自然と対応するものと看做している歴史的社会 (あるいは歴史的地域社会) を把握するには、歴史学の方法論を取得することが必要であるとする。そこで、以下にみられるように、歴史学の方法論が検討されることになる。

すなわち、従来では歴史学といえば、多くが抽象的な時間の究明のみに当てられてきた。このような方法では、順次生成、発展、消滅していく経済社会機構の時間性がほとんど考慮の外に置かれていた。それ故、前述した如く、地理的唯物論ないし宿命論に陥ることになる。そのため、地理学の進歩というものの、「地理的唯物論」から逃れることができなかつたといえる。

さらに、歴史学の方法論が取得する必要がある哲学の理論に関しても、時間性的問題に足をつみすぎた。人類社会における空間問題を問題とすべきだからである。地域社会は長い歴史を有しているのであるが、大転換期に当面している。すなわち、現在は生産力と生産諸関係の客観的な矛盾に対応する形で、主体的・創造的な契機としての地域・地域の具体的な実践の型式が求められているのである。その要求を満たすためには、歴史地理学の方法論が有効となる。この歴史地理学的方法によって、中島健一は、「われわれの歴史的な地域社会がもつ、空限的なものと時限的なもの、絶対性と相対性、ならびに、自然なものとして歴史社会的なもの、普遍性と特殊性、および、その量的・総和的＝質的・統一の諸過程」が確認できるからであると、指摘する。つまり、歴史地理学的方法は、従来からみられた学問セクショナリズムを止揚しつつ、総合的な新しい歴史科学としての理論体系に見合うものとなる。このような総合的な新しい歴史科学を人類生態学と呼んだのであった^{*17}。

地域社会は、生産諸力を媒介として、その特定の地域的自然に対応して主体的に働きかけることで、それら相互の自然および社会史変化に影響を与えることで生態学的に適生してきた。ここでいう人類生態学は、地域社会がその特定の自然条件の下で、自然と地域的人類社会のより高次の弁証論的統一を主体的かつ実践的に行なうことを基本的課題としている。

地理的唯物論に陥らないためには、①生産諸力の体系、構造、機能の歴史社会性、ならびにその諸矛盾を主体的に確認すること、②自然条件を原初的自然 (Primäre-Natur) と歴史的自然 (Historische-Natur) に類別することの2点であるとする。

それ故、このような特徴がみられる人類生態学では、労働条件を媒介とする特定の自然条件を、弁証論的自然と看做し、その諸要素を分析する。そして、これらの諸要素が地域社会の根底となる生産諸力に、個別的にまた総和的に相互に影響あるいは作用しつつ、統一プロセスにまで高められるまで弁証論的に究明する。その場合、新たな生産力を代表する階級的視角に立ち、生産力の飛躍的な発展という歴史的課題に寄与しなければならないのは当然のことといえる。この立場こそが、われわれの当面する「民主・民主的なもの」への基本的な自覚となる。

なお、特定の地域的自然の諸要素は、個別的にまた弁証法的総和として、原初的自然または歴史的自然として、相対的に把握できる。それ故、歴史的な人類の社会関係を無視した地域的自然は、新たな存在としての現実の自然を表現していない。つまり、われわれが主張する自然とは、人類社会との相関において出現する、現実の自然であるといえる。このように、中島健一は、地域的自然および人類社会という2つの述語が、自らが主唱する『地理学』の体系のキーワードとなるのである。そのため、次の第1章では地域的自然と関係のあ

る生物と環境が、第2章、第3章では自然と人類社会が考察の対象として設定されている。

第1章では、環境の定義から論が進む。中島健一は環境を次のように考えている。生活の場である環境は、生活空間という物理的な意味の如く、生物自身が支配している生物自身の延長である。つまり、「生物と環境とが別々の存在ではなく、もとは一つのものから分化・発展してきた一つの体系に属している」という。この場合の生物すなわち本章が主張する生物とは、絶えず環境に働きかけ、このような環境をそのまま支配下に置こうとするものである。しかも、この生物は、「身体を唯一の足として、また手段として生きてゆかねばならない」という宿命をもつ生き物であるという。以下では、このような生物と環境に関して順次検討していくことになる。

検討の結果、生物の存在とは、身体的行為を媒介とする環境の主体化である。また、そのことは逆をいえば、身体的行為を媒介とした主体の環境化であるといえよう。それ故、自由であるけれども、自由とはいえないのが生物的な意味での身体の特徴なのである。生物的な生命は、このような自由であり、かつ自由とはいえない生物的な身体の両面を、弁証法論的に止揚したものである。その止揚されたものは変異と呼ばれる。環境化された主体は、このような環境を主体化しようという行為を通じて、より環境化される。この環境化される過程は、 n 次元の歴史的身体の形成であり、適応の原理となっている。以上のように、中島健一は、生物と環境との関係を把握している。

生物的なものを研究するには、3条件が必要とされる。第1の条件は、生物が実存するための、構造ならびに形態学的、生理学のおよび遺伝的性質、第2の条件は、生物外の環境、第3の条件は、構造的すなわち機能的な適応=止揚の過程の3つである。生物の生態とは、これら3条件の統一的な存在として表現されている。地域的社会も、生

物的世界の構成部分である構成単位を媒介として、次元や質において異なっているが、生物的な類縁が認められる。そのため、われわれの行動や習性に関しても、生物学的地盤に根差す、つまり共通性を有している。それ故、次に問題となるのは、生物的類縁と生物的環境の問題である。

動・植物の集合体である生物は、種々の環境条件に従って、相乗り、かつ相結合している生物エネルギーを協働している。地域社会も同様に、歴史社会的な労働過程という動的な物質代謝＝質料変換 (Stoffwechsel) の諸条件を媒介として、自然環境に接続している。この場合、自然環境の中には、人類と共に生物の一員である動・植物も含まれる。そのため、生物は、種的な整合的な統一性により、自身および自身を取り巻く環境つまり世界を統制、支配しているのである。

続く第2章は、現実の地域的な歴史社会が存立する基盤についての検討が中心となる。地域的な歴史的社会が現実に機能するためには、われわれの周囲の自然から、歴史社会的な方法によって、物質的なエネルギーを汲みとる。そのことによって、自然自身をわれわれに役立つものに変化させる必要がある。それには労働が必要となる。ここでいう労働とは、生活に必要な自然の諸資料を利用するために、人間の自然力とでも称すべき、腕や脚および頭や手を使用する主体的な行為を指す。労働は手などの身体的器官だけではなく、いわば人工的器官とでもいうべき労働要具つまり労働手段を用いて行なわれる。それ故、人類は、道具をつくる動物であると呼ばれることになった。すなわち、歴史社会的諸契機に基づく「二次的自然」、いわゆる「歴史的自然」の形成である。この点こそが、人間を他の動物から峻別する本質的な差違といえる。このような労働にみられる労働手段の発展は、自然に依存する人間の力をさらに強化し、物質文化および精神文化を共に発展させることになる。

すなわち、人工的器官を使用する労働手段を媒介として、人間自身と原初的自然は、両方ともより高次の二次自然に止揚される。そのことにより、地域的な人類社会の生態史が開始される。それに加えて、生活資料の獲得様式の変化は、労働の諸過程において、生産力の発展程度に大きく依存している。それ故、労働は、地域的な人類生活史の土台となるのである。かように、本章では、サブタイトルにみられる如く、労働が人類社会の発展に如何に多大の影響を与えるかを、本論を一貫して貫き通している、マルクス経済学の理論つまり唯物史観に沿って論述されている。

第3章は、前章を受け、労働によって生み出された生産力ないし生産諸力についての議論が中心に展開される。物質的生産を行なうために地域的な社会は、特定の社会諸関係の内部に入り、このような社会諸関係を、物質代謝＝質料転換の一般条件とする。自然と人類社会の弁証法論的統一は、歴史社会的な労働過程において実現される。この労働過程は、周知の如く、労働それ自体、労働手段および労働対象の3要素を基本的要素として成立している。これらの3要素が、上述してきた歴史的自然に関与することで、生産力を地域的に創出する。なお生産力は、現実には、特定の歴史社会的な生産諸関係の枠内でのみ機能する。しかし、その後、人類の歴史社会の発展に伴い、上述した3つの基本的契機に新しい変化 (労働の熟練、労働知識、労働組織など) がみられる。つまり、協業と分業、労働手段の進歩というより高度な形態をとる。そうすると、原始的自然の特質を有しない、別の労働の対象条件があらわれる。それが歴史的自然と称されるものである。

生産力は、自然的、歴史社会的な労働過程においてのみ、環境の地域的な表現をあらわす。しかしながら、この生産力は、歴史社会的な、特定の生産関係でしか現実に機能しない。人類は、生活の社会的生産および再生産において、生産力の一

定の発展段階に応じた生産諸関係に突入する。これらの生産諸関係の総和は社会の経済構造を形成する。

地理学は、生産力と生産諸関係の地域的な交互関係およびその矛盾を各々の要素分析によって、批判的に究明する。そして、そのことにより、生産力の発展を阻止する矛盾の所在を暴きだし、生産力の発展に寄与するという学問的特色をもつ。生態学的な人類の地域社会は、歴史的発展の根源と看做される生産諸力を、歴史社会的な物質代謝＝質料変換の条件を媒介として、地域的自然の諸要素から歴史的に獲得したものといえる。生産力は、地域における人類社会の成員が、既往の歴史社会的な労働過程により、これらの地域的自然に働きかけ、社会的に獲得した全労働の成果であるともいうべきものである。つまり、社会的労働の生産力とは、地域的自然に対応する歴史的社会との相互関係を示す関数として表現できる。また、現実の生産諸力は、自然と社会的な人間エネルギーとの統合された結果である。なお、生産力の発展は、地域社会に課せられた至上命令であり、もっとも活動的、かつ革命的な生産要素である。それ故、生産発展の決定的な要素となる。

歴史的社会と地域的自然との弁証法的な統一、それは歴史地理的な景観構成をもたらすが、社会的労働の諸過程において、実践化されていく。それ故、社会的な労働過程は、人間と自然との物質代謝＝質料変換の条件となりうる。生産力の3要素である、労働それ自体、労働手段、労働対象は、労働過程の歴史社会的契機によって構成される。そのため、労働過程における、1つの条件である労働手段は、この主体的な条件である労働それ自体との関係や位置により、労働手段あるいは労働対象となる。また、労働力とは、人間が何らかの使用価値を生産するごとに、運動つまり働くところの肉体的、精神的能力の総体といえる。かような労働力の地域的、歴史社会的な性格は、労働者

が階級社会において一定の階級を構成することによって、制限かつ規制される。それ故、特定の階級によって所有される労働力は、必然的に、階級的な性質を帯びることになる。したがって、生産力と生産諸関係の歴史的矛盾に関しては、労働がとくに決定的なものとされ、その役割を演じることになる*18。生産力の社会的質は、生産様式によって規制される。この生産様式は、生産諸関係、つまり生産における労働力の担い手が占める歴史社会的地位によって、大きく規定される。

また、地域的自然と歴史的社会との弁証法的交互関係を示すものは、歴史社会的生産の技術である。かかる技術は、地域的な人類の歴史的社会では、あらゆる特殊な社会組織の物質的基礎であり、労働が行なわれる場所では社会関係の指標である。それ故、労働は、地域的な人類社会の成員が、物理あるいは化学的な自然との間にみられる物質代謝機構の1つと看做される。なお社会的、自然的諸関係は、人類の地域的社会がその基盤とする自然条件との間にみられる基本的構造といえる。さらに、全生産の行程を生産物の結果からみると、労働手段と労働対象の2つが生産手段となっている。それ故、労働手段と労働対象は不可欠な契機であるといえる。例えば、近代資本社会は、わずか数世紀間で過去の一切の時代を合計した以上の、より巨大な生産力をつくり出した。つまり、労働対象の条件となっている、地域的自然の物理、化学的な運動原理が歴史社会的な労働力および労働手段と結合し、社会的に機能するとき、生産諸力という述語が地域に登場してくる。そこにおいて、「自然的なるもの」と「歴史社会的なるもの」との弁証法的な統一、すなわち生態的表現と矛盾および止揚の原理が認められるのである。

現実働く生産力は、労働力、労働手段、労働対象の3つの要素の弁証法的統一に基づけられる。しかも、これらの諸原理は、特定の生産関係に規制されると共に、特定の歴史的、社会的な生産様

式の機構の中で形成される。それ故、自然的、歴史社会的な労働生産力も、特定の歴史社会的な生産様式および生産関係である歴史的条件により大きく限定を受けることになる。

結論として、地理学は、社会的結合が歴史的に行なわれる、特定の生産機構すなわち経済社会機構において、①生産力と生産諸関係の弁証法的統一、②諸矛盾、揚棄の歴史社会的諸過程についての普遍的原と個性の究明の2点を解明する作業を通して、歴史的社會が当面する実践的な課題に対して、学問的に寄与することを目的としている。生産力と生産諸関係の矛盾を指摘することで、地域的な人類社会において、生産・再生産の構造および機能に関する合法性が確認できるからである。社会主義的生産様式つまり生産諸関係の確立は、社会的生産諸力の解放を行なう。この解放の下で、新たな社会的生産力が出現し、それが新しい社会の建設の土台となる。

以上みられるように、中島健一は、マルクス主義の観点から、地理学の体系化を展開したのである。かかる中島健一の地理学に関する立場すなわち認識は、マルクス主義的な立場をとる地理学研究者の中でも、文中でも指摘した如く、ウィットフォージェルの地理認識に強く影響を受けている。この点も、中島健一の『地理学』の体系にみられる地理認識の特徴といえよう。

3. 水力社会論の特色

中島健一は、前項で論じた地理認識つまり方法論の下で、地理学研究を非常に精力的に実施した。中島健一の地理学の特徴は、多くの地理学研究者の場合と異なっていた。多くの地理学研究者は、勿論先行の報告書や論文に注意を払いつつ、地理学研究の特色とでもいべきフィールドサーヴェイから入手した資料に基づき、その成果を中心に研究を進めた。これに対して、中島健一は、海外での事例研究が主体であるとはいえ、卓越した語

学力を駆使し、多数の外国語文献に基づいて研究を行なった。このような傾向がみられるのは、中島健一の研究視角すなわち立場が一貫している。その研究視角すなわち立場を示すと次のようになる。

歴史的社會では、人間と自然とが整合的かつ調和的に共存することが可能となる場合には、歴史的條件が必須の要素である。しかし、人間の歴史は、各々の地域性に根差した自然の歴史とも分離しがたい。文明が如何に発展・進歩しようとも、自然の要素を離れて人間の生命的な営みは成立しえない。この自然の要素——例えば、大気、水、食料、衣服、住居など——は、人間の生存を維持するための、グローバルな生きたシステムの中に存在している。われわれ人類は、ここ100年間に進行した自然破壊の習性などに慣らされてきた。その結果、自然と人間との間にみられた、これまでの調和と整合および共存の原理を忘却してしまったかのような状況を呈している。古代の河川文明にみられる歴史的過程は、人間生存のための、自然システムの整合とかかるバランスの重要性を明確に示している（中島 1977：2-3）。このような河川文明の基盤つまり土台となったのが、河川およびそれに付随する灌漑を中心とする自然システムを技術的に統合した強大な支配権力であった。かかる強大な支配権力を手中に治めた支配者によって成立した社会や国家は、一般的に水力社会、水力国家と称される*19。

以上論じたような研究立場つまり視角に研究に従事したのであった。すなわち、「理論的には、人間の生命論を中心にすえて、これまでの自然科学と社会諸科学とを総合＝統一するひとつの歴史的科學《human ecology》への道を志向する試論」（中島 1983：4）であった。なお、ここで言及している人類生態学（Human Ecology）は、既に紹介したように、方法論としては歴史地理学的手法を採用している。また中島健一は、人類生態

学を生物地理学の一部として考えているようである*20。

このような地理認識に基づき、中島健一は、水力社会の具体的な事例研究に従事する*21。具体的な地域としては、古代オリエント（中島 1973）、両河（メソポタミア）地方・ナイル河谷・インダス地方・黄河地方（以上4地域は中島 1977）などが選ばれている。

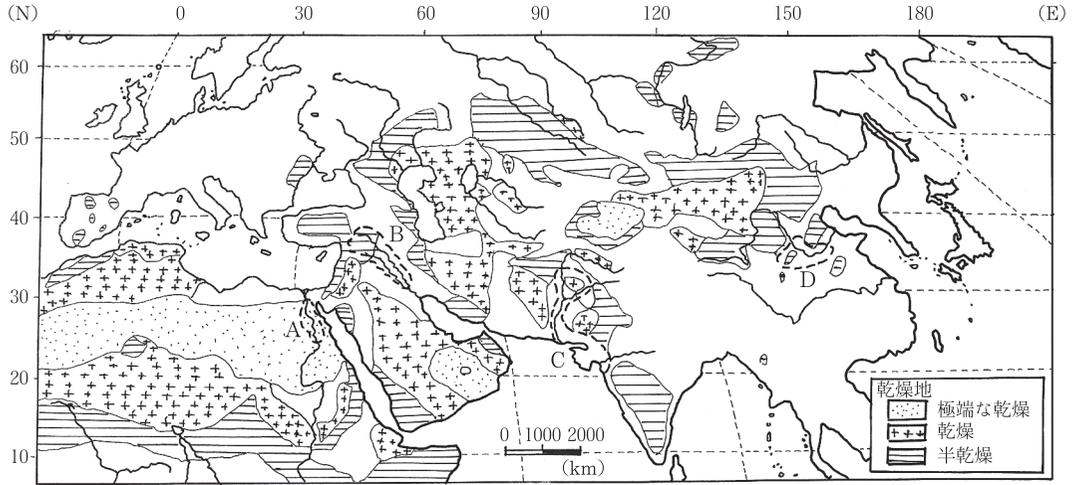
以下では、これらの地域の中で、両河地方の事例研究を中心に水力社会論について論じていくことにする。両河地方を研究事例に選定した理由は、両河地方が含まれる、近・中東は紀元前 3000 年頃から温暖・乾燥化が目立つようになった。さらに、森林の乱伐や過放牧など人為的事件が重なって、土壌の構造や分布の変化がとりわけ著しくなった。その中でも、両河地方は、氾濫原の土壌は河川流水量の減少、流泥の堆積および灌漑・排水システムの乱調などにより、歴史的に大きく変化した地域である。それ故、水力を統制・支配した権力者が、その社会や地域を支配するという、代表的な地域であると看做されるからである（中島 1977 : 18-19）。

水力社会は、水力を管理・統制する機能がとくに卓越している社会である。水力はどのようにして求められてきたのであろうか。両河地方を含む近中世では、北アフリカやパキスタンなどと同様に、紀元前 5000 年過ぎ頃から、乾燥・半乾燥地帯からやや温暖・湿潤的な気象条件に移行した。この移行を契機として、オアシスの周辺地域や雪解け水に恵まれた丘陵斜面などでは、天水（雨水）を利用する天水農耕*22 や乾燥（旱地）農法*23（dry farming）が開始された（中島 1983 : 11）。かような天水農耕や乾燥（旱地）農法は、多少年代が下がり、紀元前 4000 年末期から 3000 年初期になると、放棄されはじめた。理由としては、天水の減少や人口増加に伴う食糧不足などが挙げられる。両河地方は、その名前が示すように、ティグ

リス=ユーフラテス川の流域を範囲とする。この外来河川を用水源とする新たなる農法すなわち灌漑農法が成立した*24。人びとが季節的氾濫による増水が減少したことを受け、氾濫原の周辺地帯に移動しだしてきたからである。以下では、両河地方の水力社会を具体的に検討していく。

乾燥・半乾燥地方に含まれる両河地方において、灌漑がかかる社会の成立に大きな影響をもたらしてきたことを論じてきた。両河地方は、灌漑農法による畑作を物質的基盤として、驚異的な発展がみられ、繁栄し、そして衰退するという過程を辿った。このような発展・繁栄・衰退という3段階の過程は両河地方のみならず、古代の4大河川文明の発祥地（第1図）と称される地域において共通した過程を経過した。これら4大河川の中でも、とくに両河地方の灌漑農法は、農作物の生長・成育期に唯一の用水路であるティグリス=ユーフラテス両河川の季節的な氾濫による増水を技術的に管理・調節するという独特の農法であった。しかし、両河川の水収支を管理・調節して、氾濫原周辺地帯における農地の生産性を向上させるために、灌排水の作業に伴う多くの労働力と、それを可能にし、かつ支配する強力な政治的権力を必要とした*25。この強大な政治権力の衰退は、灌排水システムの管理・調節を困難にした。そのため、増水により運搬されてきた泥砂は農地となっていた氾濫原に堆積し、灌排水路が十分に機能しなくなった。その結果として、灌漑された農地には塩化現象が生じだした（中島 1977 : 58-61）。

以上論じたように、両河地方は進展していったが、最終的には衰退することになった。すなわち、両河地方においては、強力な政治権力による支配が安定した時代では、灌排水システムが十分に管理されていたため、農業の生産性が高く、非常に繁栄していた。しかし、上述した支配体制が硬直化し、崩壊しだすと、安定していた豊かな水力社会は、一転して衰退に向うことになった。このよ



A ナイル河谷 B 両河地方 C インダス地方 D 黄河地方

第1図 世界の乾燥地域と古代4大河川文明の発祥地

〔出所〕中島健一（1983）『灌漑農法と社会=政治体制』校倉書房 12-13頁 第11図を一部修正して作成

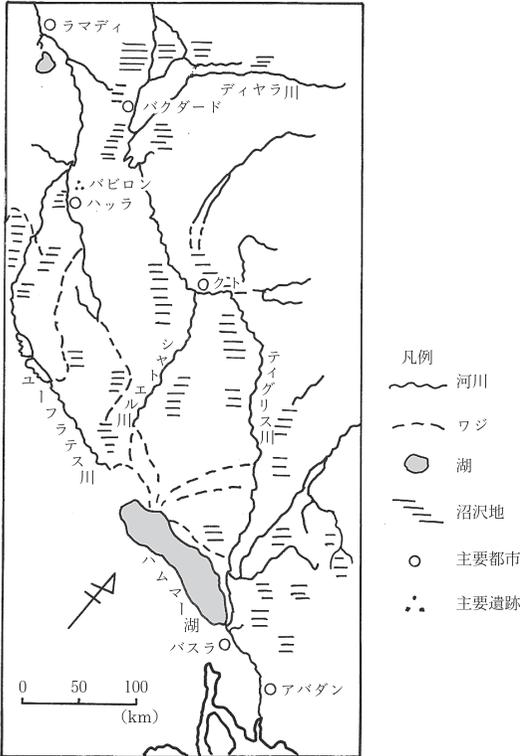
うな両河地方の水力社会の状況をさらに分析・検討していく。

古代の4大河川文明の中で、両河地方は、とくにティグリス=ユーフラテス両河川という荒れ川の地域を占めているという条件以外に、次のような自然地理学的特色を有していた。すなわち、夏季は耐えがたい暑さが連続し、冬季は寒く、かつ霧も深いという低緯度地方ではもっとも気候条件が劣悪な地域として知られていた。それに加えて、降雨は不規則であり、少ない。そのため、大地は大変埃っぽい。とりわけ、氾濫原の低地地帯では、灌漑設備が完備していなければ、作物の栽培は期待薄であった（中島 1977：62）。しかしながら、このような非常に劣悪な自然地理学的な条件にもかかわらず、古代の4大河川文明の中で、最初に高度な文明をもつ社会が形成されたのは、両河地方であった。このような高度な古代文明は、その地域名をとって、一般にはメソポタミア文明と称されることが多い。その成立の理由としては、初期の段階において、農民たちの集団労働により、河川水をコントロールし、大規模な灌排水路を構築することに成功したことである（中島 1977：62）。

以下では、このような過程を具体的に展開していく。

ティグリス=ユーフラテスの両河川は、トルコ共和国東部のアナトリア高原の東に続く、アルメニア高原を水源地としている。両河川の共通した特徴としては、両河川が水源地としているアルメニア高原を形成する石灰岩や泥板岩などの母岩が風化した塩化物の多い表土を削り、その塩化物が河川に溶け込んでいることである。これらの塩分は、ナイル川など他の河川と比較すれば多くない。しかし、両河地方の氾濫原にみられるように、農地に継続して灌漑を行なっていくと、かかる農地は塩分が増加してくる（中島 1977：51）。そのため農業が困難となる。このように、両河地方の農耕は、ある面では塩害との闘いでもあった。

両河地方の中でも、中・下流を占めるメソポタミア低地は、ほとんど樹木がみられない、広大な沖積平野である。この広大な低地を開発し、農作業を実施するために無数の排水路が掘られた。しかし、これらの排水路は、水はけが極めて悪く、到る場所に塩分を多量に含む沼沢地が形成されていた（第2図）。また丘陵地など高所であっても、



第2図 ティグリス=ユーフラテス川下流の沼沢地
 (出所) 中島健一(1977)『河川文明の生態史観』校倉書房
 63頁 第4図を一部修正して作成

乾燥が激しく、耕地の表土は固結し、耕作することは不可能に近かった。このような条件——湖(ハマール湖)や沼沢地への滞水、流水自体の蒸発など——のため、ティグリス=ユーフラテス川の流量は、河口があるペルシア湾まで達するのは、僅か10パーセントに過ぎなかった。そのため、河川によって運搬されてきた泥土は、増々平野に堆積し、排水を困難にした*26(中島1977:79)。上流域においてもこのような状況は同様で、泥土の堆積が排水を防ぎ、耕土は二次的塩化によって不毛と化した*27。

ナイル川の氾濫は、1ヶ月前に予測が可能であった。ナイル川は、まるで暦のように正確に増水し、かつ減水した。それ故、その流量も毎年ほぼ一定していたからである。これに対して、ティグリス=ユーフラテス川の氾濫は、時期および流

水量が一定せず、種々な時期に増減水を繰り返した。理由は、河川の水源地であるアルメニア高原の雪解け水と、春季に集中するトルコでの雨季が重なる、3・4月に急に流量が増加し、6月にかけて氾濫することが多いという傾向がみられる。しかし、アルメニア高原の気象条件やトルコの降水量などが非常に不規則であるため、氾濫期は一定していなかった(中島1977:78)。そのため、アルメニア高原の雪が急に解けだしたり、トルコで大量の降雨に見舞われたりすると、天井川であるティグリス=ユーフラテス川から多量の氾濫水が流れだし、流域の低地の耕地や集落を水没させ、かかる水力に依存している社会の機能を麻痺させることになった。両河地方では、こうした状況を回避するために、ティグリス=ユーフラテス川の若干の河床高低差を利用した、灌排水システムを建設した。すなわち、河床が高いティグリス川から、低いユーフラテス川に向けて多くの排水路を設置し、耕地に多量の用水を供給した。さらにまた、ユーフラテス川の水量を調節するために、要所ごとに堰堤を築いた。このようにして、氾濫期における耕地や集落の被害の防止に努めた。この灌排水システムを整備し、管理・統制したのが9世紀を中心とするアッパーシド時代(850-1000年)のカリフであった(中島1977:77-88)。

両河地方において、ティグリス=ユーフラテス川周辺の丘陵地帯から、川沿いの平野に降りてきた最初の住民は、シュメール人であった。シュメール人たちは、この平野において、水路式灌漑を行なうことで農業を開始した。シュメール人たちは、水路を開削することで、氾濫による溢流を引き入れた。そして、その水をダムや溜池で堰止め、農作物が必要とするときに放流した。しかし、氾濫直後に河川から用水を引くという技術は非常に難しく、河川の要所に設置した水門を操作する必要があった。この操作のタイミングが適切でないとい灌排水システムがうまく機能しない。それ故、

二次的塩化が生じ、農耕が困難となる(中島 1977: 81)。

以上述べた農耕方式が成立したのは紀元前 4000 年頃と推定されている。前述のシュメール人たちは乾燥化と人口増加のために、ティグリス=ユーフラテス川沿いの氾濫原周辺地帯に移住してきたのであった。この集団は、葦作りの小屋に居住し、水路を建設して沼沢地に排水していた。河谷地方における最初の水力社会の成立といえよう。ティグリス川は、イラン・イスラム共和国をほぼ北西から南東に走るザクロス山脈を水源とする多くの支流からの水量が多い。そのため、流量が多く、季節的な氾濫も激しく、急流として有名であった。とくに南部地方は、水源のほとんどをユーフラテス川に求めていた^{*28}。

当時の両河地方の低地においては、ナイル川流域と異なり、ティグリス=ユーフラテス川が運搬してくる泥土を直接農耕に止揚することができなかった。農作物の生育・成長には有害とされる塩化物が多量に含まれていた。そのため、一旦運河に引き入れて流泥を落とし、沈殿させた後、貯水池などに入れて溜めておいた。その後需要に応じて、貯水池などから水路を通して各耕地に用水を分配した。それ故、用水の厳格なコントロールを必要とした。このような灌排水システムを維持するには、非常に多くの労働力と、協同作業を実施するための組織および管理・統制の集中化が求められた。そのためには、強力な政治的な統一体制が必要となった。かような政治的な統一体制が成立すると、地域的な水力社会から水力国家への道が開かれることになった^{*29}(中島 1977: 83)。

以上のことから判明するように、古代の両河地方の農民たちは、灌漑農地の二次的塩化を防止し、その生産性を維持向上させていくために、いわば両河地方の独自の灌排水システムとでもいべきシステムを考案した。そして、この灌排水システムの造成あるいは修理などに関しては、管理・

統制している権力者からの強制的な労働の提供に応じるようになったのである。中島健一は、この点について、「政治的な必要悪としての専制体制(despotism)に妥協したにちがいない」(中島 1977: 86)と推察している。換言すれば、農耕地が不毛になりかねない灌漑農地の二次的塩化の危機を避けるべく、支配者すなわち河川灌漑の「総請負人」の圧制と収奪に耐えてきたといえよう。

これまで論じた両河地方における、灌排水システムによる耕地の開発は、シュメール人、ウル王朝(第I期-第II期)、古バビロン時代、アッシリア時代と連続していった。このような灌排水システムは、中央権力が微弱なときは十分にこれらのシステムを管理・統制することができず、耕作面積が縮小されることもあった。しかし、最終的には、崩壊はモンゴル軍のバクダード攻略(1258年)によるとされる(中島 1977: 90)。

なお、中島健一によれば、古代4大河川文明の中で、両河地方には次のような特徴がみられるという。すなわち、ティグリス=ユーフラテス川の中・下流域においても、とくにユーフラテス川の河床は流路を度々変更した。そのため、このような自然の暴力に対して、住民たちは不安を感じ、神の怒りを恐れた。メソポタミア地方の氾濫に関係する神は、エア(Ea)、アプシュ(Apsū)、ニングルス(Ningurs)、ティコマト(Ticomat)を筆頭に、悪意に満ちた恐ろしい神である^{*30}。神の力を鎮めるためにも、かような神に供物を供え、祈りを捧げなければならなかった。初期の両河地方の神話には、自然そのものが恐るべき混沌として観念されていることから連想されるように、自然は神として恐れられていたのであった。中島健一は、これらの神への恐れが農民たちをペシズムに追いやったとする(中島 1977: 100)。このことこそが、権力者が灌漑農耕民を支配・統制することを容易にしたのかも知れない。それ故、これらの灌漑農耕民たちによって形成された社会、つ

まり、水力社会を容易に支配することができたのではないか、と推察できる。

4. 結論——結びに代えて

地理認識に関して、中島健一の著作に従って論を進めてきた。中島健一の地理認識の特徴としては、自らが主張する思想的立場、すなわちマルクス主義に基づいて、古代ギリシア-ローマ時代にその起源を有する地理学を批判的、具体的に分析・検討することで、地理のもつ学問的性格を明らかにしたことである。地理学、なかんづく伝統的地理学は、既に本論でも指摘したが、本来、自然および人間に関する総合的な知識を修得するものとして、実践的な意図および役割を学問的使命としてきた。かかる実践的な意図および役割とは、それぞれの時代における権力者つまり支配階級の要望を満足させるものであった。この点に関して、従来の地理学研究には以下の2つの潮流がみられた。その潮流の第1は例えば、近代初頭に抬頭した商業地理学に代表されるように、貿易などの商業に役立つ、海外における各地域や国家の地理的知識を提供する「記述地理学」的な研究である。潮流の第2は、古代からの地理学が一貫して継承してきたテーマである自然と人間についての研究である。この研究方法は、中島健一が地理学研究の指針としたマルクス主義の視点による地理認識で、「地理学的唯物論」*31 的な研究とされているものである。中島健一は、かかる立場をウィットフォージェルの地理認識から得た。これら上述した2つの潮流は、中島健一の地理学研究にも大きく関与している。すなわち、前者の第1の潮流については、マルクス主義の立場から、ブルジョア科学つまり、支配者階級のみを利益を最優先に考えていると強く批判する。後者の第2の潮流について、自然を人類社会の決定者と看做す傾向がある「地理学唯物論」に、多くの地理学研究者が従っていると厳しく批判する。このように、従来の地

理学とは根本的な立場の相違が存在すると主張する。この点を克服できるのは、唯一マルクス主義的な地理学的手法による研究であるという*32。

以上論じたように、中島健一の地理学研究は、ウィットフォージェルの地理学研究に大きく依存する、マルクス主義的な立場から批判的に実施するということ、出発点であった。そして、この中心的な思想つまり考え方が地理認識なのである。このような立場を採用しているので、研究順序としては、自らが提唱する地理学の体系を提示することから開始することになった。その体系は本論において検討した。中島健一が提唱する地理学の体系は、マルクス主義をその根底に置いているためか、一般の地理学の体系とはかなり異なったものであった。わが国においては、とくに他の学問分野と同様に、部門内での専門の再分化が進展している。その結果、地理学の主要部門を構成する地形学、気候学、都市地理学、文化地理学など個々の部門についての著作が多数存在するが、自然および人文・社会の両部門を1冊の書物として体系的に扱ったものは非常に少ない。そのようなことから、比較の意味でとりあげた著作は出版年次が古く、現在の地理学の研究動向を正確に反映しているとは断言できないが、代表的な地理学の概説書として、渡辺光の著書(渡辺 1977)が挙げられる。同書の目次は、巻末の文献、人名索引、事項索引を除外すると、次のような構成となっている。

- 第1章 序章—地理学の目的と内容—
- 第2章 地理学形成の過程—地理学発達史—
- 第3章 地理学の本質と使命
- 第4章 環境に関する諸問題
—その地理学との関係—
- 第5章 地域論
- むすびのことは

渡辺光の著書で注目されるのは、今日の応用地

地理学の研究事例として、ロシア連邦の有名な地理学者バランスキーが経済計画に参画したことを述べた程度で、マルクス主義的な地理学研究に関しては、まったくといってよい程、論じられていない点である。それ故、渡辺光の地理学の体系には、多くの地理学の著作同様、マルクス主義的な立場からの地理学の体系がまったく組み込まれていない。中島健一の地理学の体系は、本論でみられた如く、この点、つまりブルジョア科学に立脚した地理学を批判することから開始されたのであった^{*33}。さらに、中島健一の著書では、かかるブルジョア科学に基づいた具体的な先行研究あるいは事例研究の分析・検討はまったくみられない。また、この点は、概論あるいは概説書であるという同書の性格とも関連していると考えられるが、比較としてとりあげた渡辺光の著作では、先行研究の紹介・分析が存在する。しかし、フィールドサーヴェイの成果に基づいた事例研究がほとんどみられない。この点は、上述したように、同書が概論という性格を有していたからであると推察できる。中島健一の著書では、渡辺光の著作と異なり、方法論すなわち考え方が主体の思弁的な内容が大半を占めている。この点は、一般の地理学的著作とマルクス主義的な立場をとる中島健一の著書との最大の相違点といえよう。

以上論じた特色を有する中島健一の地理学の体系にみられる地理認識とは、どのようなものであろうか。既に幾度となく述べた如く、中島健一の著書は、ウィットフォールゲルに依拠する、マルクス主義に基づく地理学方法論によって書かれた。それ故、地理認識とはかかる方法論にその根拠を求めることができよう。すなわち、それは、第1に、伝統的な地理学の立場を継承してきた「記述地理学」にみられる、地理的事象の羅列的な研究に代表される立場に関してである。この立場による研究では、何故地理学を研究するのかという方法論が欠如しており、それを克服する新たな方法

論に基づいた地理認識である。第2は、単なる地理的決定論を排除した、自然と人間との関係を念頭に置いた「地理的唯物論」を基盤とした地理認識である。この地理認識の具体的な研究事例として注目したのは、自然と人間との関係が直接大きな影響を与える古代の水力社会であり、その水力社会の分析を通して具体的に地理認識の把握に努めたのであった。本稿では、古代4大河川文明の最初の発祥地とされる両河地方に関して、中島健一の著述内容に則して、分析・検討を重ねてきた。その内容に関して、再度繰り返す余裕をもたないが、研究事例とした両河地方は、典型的な水力社会およびその社会を基盤として発展した水力国家が成立していたことが確認できた。なお、本稿において論じることができなかった、筆者の中島健一の著書を含むマルクス主義的な立場の地理認識に関しては、稿を改めて展開したいと強く念じている。

付記

本稿の骨子は、平成28年(2016)度本学大学院生活機構研究科生活機構学専攻(博士課程)講義科目「生活文化研究Ⅱ・A」の講義案として作成したものに、若干の加筆・修正を加えた草稿に依った。そのため、内容の一部に重複した箇所がみられる。受講する院生の理解を助けるためである。御了承願いたい。

註

*1—ただし、飯塚浩二、辻村太郎、三沢勝衛という3名の地理学研究者を個人的に研究対象とした著作では、中島健一の名前がみられる。それは、飯塚浩二の地理学研究ではなく、東洋社会の考察・分析に関して、不満を抱いている研究者の一人としてである(岡田 1992: 91, 143)。つまり、このような点でしか中島健一に言及していないことは、中島健一を地理学研究者としては評価の対象外に置いているように思われる。

*2—「孤高の地理学研究者」としては、郷土の地理教育の重要性を強調した三沢勝衛、地理学の体系

化を試みた西亀正夫、地理教育者でもあり宗教家でもあった牧口常三郎などが挙げられる。なお、これら研究者の中で、三沢勝衛、西亀正夫の両名は、旧制中学校の教員であったが、師範学校出身ではなく、文検地理学科試験に合格した、いわゆる「文検」の中学校地理科教員であった。それ故、独学で地理学を学習した研究者であった。

- *3—官学派の大学の事例として、京都帝国大学（現京都大学）、東京帝国大学（現東京大学）、東京高等師範学校（現筑波大学）、正統派大学の事例として、立正大学、日本大学、立命館大学などの地理学科が挙げられる。なお、わが国において最初に地理学科が創設されたのは、京都帝国大学で、明治40年（1907）に文学部史学科の中に史学地理学講座が開設された。史学地理学講座は3講座であり、第1、第3講座が西洋史、第2講座が地理学であった（京都大学文学部地理学教室編 2008：8）。
- *4—早稲田大学文学部（現文学学術院）では、現在と同様に、地理学専修コースが設置されていなかった。
- *5—「新成唯物論全集」は、その宣伝パンフレットに、わが国唯物論の百科全書であり、「唯研」（唯物論研究会）が責任をもって編集し、全70巻がすべて書き下したものであると記されている。中島健一の『地理学』は、自然科学と技術という分野の1冊として刊行された。なお、本全集は種々の事情から完結しなかった。
- *6—京都帝国大学教授で、第2次世界大戦前の日本を代表する地理学研究者。先史時代を中心とする歴史地理学を専門としていた。地政学者としての小牧実繁に関しては柴田陽一の研究（柴田2006）に詳しい。
- *7—企画院の外郭組織として、1938年9月に設立された国策の調査・研究機関。日中戦争（1937-1942年）の遂行に貢献する目的で、とくに日本の地域研究が遅れていた東アジア全域の地域研究を実施することが目的であった。所員の中には、左派（マルクス主義者）の研究者も多数いた（柘植 1979）。
- *8—文部省直轄研究所として1931年1月に設立。準

備段階で岡正雄ら民族（文化人類）学者が協力した。当初日本最大の人類学研究機関であった。中生勝美によれば、「机上の学問ではなく、現実に役立つ研究をする民族学」を設立目標にした」（中生 1997：60）という。しかし、国策の下に、実証研究に従事した事実は認めなければならない。

- *9—‘Hydraulic Society’ という述語は、ウィットフォーゲル（Wittfogel, K. A.）がその大部な主著（Wittfogel 1957, 湯浅訳 1995）などにおいて使用した主要な概念である。この述語を中島健一は「治水社会」と訳している（中島 1973：123など）。しかし、前述のウィットフォーゲルの主著などでは‘Hydraulic’をその語義に近い「水力」と訳し、‘Hydraulic Society’を「水力社会」としていることが多い。本稿でも前稿（田畑 2016a）にならって、水力社会とした。
- *10—同様の立場をとる地理学関係の著作（単著）は、1970年までに限定しても、小原敬士（小原 1950, 同 1965）、小林新（小林 1960）、鴨沢徹（鴨沢 1960）、上野登（上野 1968）、西村高夫（西村 1970）と数は多くはないが継続して刊行されている。しかしながら、本文で論じたように、これらいずれの著作も中島健一の著書後に出版されている。それ故、中島健一の著書は、かかる立場による第2次世界大戦以降の先駆的な役割を果たした研究書といえる。なお、これら著作に共通してみられる特徴としては、鴨沢徹を除く研究者が、岡田俊裕が主張するアカデミー地理学の官学派あるいは正統派に所属しない、経済学部の出身者であることが挙げられる。
- *11—一般に他の文献からの参考・引用に関しては、その都度該当する箇所をページ数を含む出所を明示することが求められる。しかしながら、以下の本文においては、『地理学』からの検証が中心であり、ほとんどが同書からの参考・引用である。それ故、それぞれ参考・引用した箇所を本文中に明示することは、かえって文章が読みにくくなることが予想される。そこで、『地理学』に限り参考・引用については、各々該当する箇所を本文中に明示することを避けた。ただし、直接引用に関しては、その箇所を鉤括弧で示し

たり、長文の場合は段落を変え、各行左端の文字を1字分右に寄せた。

- *12—このような傾向の事例として、チューレン (Kjellén) が首唱した「地政学」が挙げられる。中島健一は、ウィットフォーゲルに依拠して、「地政学」を独占資本による帝国時代における、かの古い「地理的唯物論」の悪しき悪流の現代版としている。
- *13—近代市民的という場合の「市民」は、現在一般に使用されている意味内容とは若干異なっている。すなわち、現在では、農村など村落に居住する「村びと」に対する対概念として、都市に住む住民という意味で用いられている。これに対して、本稿では市民を、1760年代にイギリスではじまり、1830年代にヨーロッパに波及した産業革命により新たに出現した集団を指している。それ故、近代的という形容詞が市民の前に付されているのである。産業革命以後に形成されたプロレタリアートに対する概念であるブルジョアジーがこれに該当する。
- *14—本文にみられるように、従来の地理学批判から論が展開されているという章立ては、中島健一が地理学の有力な方法論の根拠にしている、ウィットフォーゲルの地理学に関する長文の論攷 (Wittfogel 1929 川西補訳: 1933) とほぼ同様である。かかるウィットフォーゲルの地理学方法論は、中島健一のほか、同論攷の翻訳者でもある川西正鑑の著作 (川西 1935 など) においても確認できる。
- *15—中島健一は、『地理学』において、このように判断した。しかし実際には、アメリカ合衆国を筆頭に資本制社会機構を採用している資本主義国は崩壊しなかった。むしろ崩壊したのは、対峙する社会制 (社会主義的) 社会機構をとっていたソビエト社会主義共和国連邦 (現ロシア連邦) など社会主義諸国であった。なお、中島健一の地理学的立場は、ウィットフォーゲルの地理思想の影響を受け、そのことも影響してか、かつてのソ連邦あるいは中華人民共和国などが採用している、いわゆるマルクス主義とは異なる立場から、マルクスを理解していたようである。

筆者は、ウィットフォーゲルのマルクス主義に関しては、自らも参加したフランクフルト学派の初期の立場に近いと、現在のところ推定している。フランクフルト学派全般については清水多吉の著書 (清水 1977) を、またフランクフルト学派を代表するホルクハイマー (Horkheimer, M.) およびアドルノ (Adorno, T. W.) の思想に関しては、両名の共著 (Horkheimer and Adorno 1947, 徳永訳 2007) を参照した。

- *16—この点に関して、中島健一は、「眞理はつねに具体的であり [リエニン] (レーニン, Лénин, В. И. のこと—筆者註), その具体的眞理はつねに、『自然的なもの』と『歴史社会的なもの』との弁証法的統一過程のなかに厳存する」と述べている。
- *17—中島健一は、その後に書かれた論攷において、「このような歴史的科学を「歴史地理学」または《人間生態学》(Human Ecology; Antropo-ökologie) と名付けたい」(中島 1954, 中島 1961: 21) と述べ、従来から主唱してきた人間(類)生態学を歴史地理学と同義語として使用することを提案している。人間(類)生態学の方法論を歴史地理学の方法論に求めようとするからであると推察できる。それ以降の中島健一の著書においては、本論攷のテーマにみられるように、歴史地理学という述語が専ら使用されることになる。
- *18—『地理学』では、次のような論が展開されている。すなわち、生産力と生産諸関係との間にみられる諸矛盾は、階級社会においては、階級闘争となつてあらわれる。社会革命とは、かかる諸矛盾を打破してさらにより高度な社会的段階へ止揚する契機となる。つまり、生産力と生産諸力の諸矛盾が、社会革命を呼び起こす端緒となると指摘している。
- *19—水力社会という述語をキーワードとして科学的に分析・検討した代表的な研究者がウィットフォーゲルである。ウィットフォーゲルの水力社会論およびその発展形態である水力国家論に関しては、ウィットフォーゲルの研究業績を正当に学術的に評価している、湯浅越男、石井知章の著作 (湯浅 2007: 54-67, 石井 2008: 70-115)

に詳しい。

*20—この点に関しては、中島健一の主張と異なり、生物地理学を人文地理学の1部門と看做す見解も存在する。中島健一は、この見解を古典的見解と呼んでいるのであるが、フランスの自然地理学者ドゥ・マルトンヌ (de Martonne, E.) が発表したものである。ドゥ・マルトンヌの見解は、飯塚浩二がフランス地理学の祖と称されるブラーシュ (Paul Vidal de la Blache) の遺稿 (1922) “Principes de Géographie Humaine” (飯塚訳 1940 同改訳 1970) の解説の中で詳しく論じている (飯塚訳 1970・上巻:7)。

なお、同解説において、飯塚浩二は、ブラーシュから伝えられた貴重な遺産が3つあるという。かかる3つの遺産とは、①人類と自然との間の諸関係を人文地理学の主題とすること、②生物地理学の方法ないし成果を許される限り導入すること、③歴史的見地の重要性を素直に承認することである。以上からも明白な如く、中島健一の地理認識の視点は、ブラーシュの見解と類似する面も有している。

*21—ウィットフォージェルの水力社会論に関しては、水力社会論の成立の背景やその特徴を含めて、中国を研究事例として論じたことがある (田畑 2016a)。中島健一は、ウィットフォージェルの水力社会論に多大の影響を受け、かかる把握方法に近いことから、本稿では、水力社会論自体の解説および詳細な分析・検討は割愛する。なお、この点に関して、中島健一が著作の中で、ウィットフォージェルの水力社会論と深い関係を有する論攷を全訳して紹介していることから知られる (中島 1977:205-227)。中島健一は、ウィットフォージェルの上述論攷のテーマに使われている ‘Hydraulic’ を問題があるとしつつ、「治水的」と訳している。本稿では、同語が一般に訳されているように、「水力的」とした。

*22—農耕とは耕地 (農地) を耕やすことである。広義 (一般的) の解釈としては、家畜を牽かせる犁を用いる段階までの農業を指す。これに対して、狭義の意味では、農業の原初的あるいは初歩的な形態をいう。この場合の原初的あるいは初歩的な形態としては、農業を行なう場合必要

とされる農具および肥料を原則として使用しないという特徴がみられる。本稿では、農耕を前者すなわち広義の解釈で使用する。なお「農耕」、「農業」は、英語では区別せず、共に ‘agriculture’ という。

*23—乾燥地域あるいは半乾燥地域の限界地帯において、灌漑することなしに、耐寒性の作物を特殊な技法を用いて行なう農法をいう。なお、特殊な技法とは、耕地を深く耕やすことで降雨を土中に浸透させる。そのことによって土壤の毛細血管現象を遮断し、わずかな降雨を有効に利用する技術を指す。

*24—中島健一は、灌漑農法の特徴を次のように論じている。灌漑農法は、農業生産力を保技・発展させるために、水量の不足に代表される気象条件の不備を補うために考案された。すなわち、農作物の生産・成長の生理的サイクルに必要な水量を供給することを目的とする。そのためには、両河地方に代表される乾燥・半乾燥地方においては、耕地の塩化の危険を防止することが必須となることから、灌水や湛水と共に、排水設備など水収支の充分な管理・支配がとくに要求されるとする (中島 1977:31)。これらの耕地の塩化に関して、中島健一は、乾燥・半乾燥地方の灌漑用水には多量の塩分を含んでいることは事実であるが、排水のシステムが整備されれば、灌漑用水として継続的に利用できると指摘している (中島 1983:19)。それ故、両河地方などの灌漑農法の社会では、「水を治める者は天下を制す」という名言にもあるように、農民支配の政治的条件として非常に重要な機能を果たしてきたと主張する (中島 1977:37)。

*25—中島健一は、この強大な政治権力を所有する権力者を、エンゲルス (Engels, E.) の主張に倣って、河川灌漑の「総請負人」(Gesamtunternehmer in der Berieselung der Flusstäler) と呼んだ。

*26—歴史時代に入ると、かかる地方の灌排水路は、上流から運ばれてくる泥土によって、度々流路が変わった。そのために、古代に都市として栄えたシッパル (Sippar)、ニップル (Nippur)、ウル (Ur)、ウルク (Uruk) などの諸都市は、

砂漠の中に埋没した。現在でも、このような砂漠化が継続して進展している（中島 1977：74）。

- *27—耕地の塩化は、上流から運搬されてきた塩分を多量に含む濁流によって生じる自然的現象である。ナイル川流域のように、灌排水システムが比較的完備し、機能してくると、塩化は阻止することが可能である。しかし、ティグリス=ユーフラテス川は天井川なので、氾濫原の地下水位が高い。そのため、洗塩のための排水設備が完全でないと、地下水の蒸発により塩化物が地表に堆積する（中島 1977：40）。このような自然によるだけでなく、人為的な作用も関連している塩化現象を二次塩化という。
- *28—ティグリス川の水が灌漑用水として重要となってくるのは、古バビロニア時代（紀元前 1988 年頃—紀元前 1595 年）以降である。この時代に入ると、乾燥化が後退し、川沿いの氾濫原にも多くの住民が居住しだしたからである（中島 1977：82）。
- *29—この点に関して、中島健一は、ウィットフォールの主張（Wittfogel 1956 中島 1977：205-227）に従って、「古代オリエント文明の諸地方における巨大な灌漑=治水システムの発展は、技術革新によって発生・発展したのではなく、苛酷な自然的諸条件に適応し、対決して生きていくために、人間の組織や制度の改革——ヒューマン・エコ・システムをとおして、発生・発展してきた」（中島 1977：83）としている。以上の点から、中島健一の地理認識は人間生態学的な立場を中心においていることが判明する。
- *30—この点が古代エジプト人たちが称賛したとされるナイルの神（Hapi）や、親愛に満ちた主神（Osiris）と基本的に異なっていると看做している（中島 1977：100）。これらの両地方の神の性格が異なるのは、規則的に氾濫し、管理・調節が容易であるナイル川と、氾濫の規則性もなく、管理・調節が難しい荒れ川であるティグリス=ユーフラテス川の、河川としての性格の相違も理由の 1 つといえる。
- *31—このように、自然と人間との関係を地理学研究的の 1 つの有力な潮流と看做す考え方は、一般に

は、「地理学唯物論」と呼ばれるのではなく、「環境論」あるいは「地理的環境論」と称されることが多い。「環境論」に関しては、野間三郎・堀川侃（1955：168-208）、渡辺光（1977：178-209）に詳しい。

- *32—ウィットフォールの地理認識に基づく、中島健一の地理認識は、わが国の多くのマルクス主義的地理学研究者から、ウィットフォールの地理認識が無視あるいは否定されるのと同様に、無視されることが多い。ウィットフォールの地理的立場である地理認識が否定されている事例として、次のような事実が存在する。それは、わが国のマルクス主義的立場から書かれた代表的な著作の 1 冊と目される山名伸作の著書（山名 1972）において典型的にみることができる。かかる著書の中で、山名伸作は、著名な経済地理学研究者である川島哲郎の論攷（川島 1952：59-114）を引いて、ウィットフォールの主張、すなわち、生産過程の社会的諸条件（力）の増大と共に、自然契機の意義もまた増大するという命題に対して、非科学性がみられる。理由は、「生産諸力の基本的な性格の理解について誤りがあるからである」（山名 1972：5）と論じ、ウィットフォールの地理学的研究を否定している。

なお、山名伸作が引用している、川島哲郎の論攷のページ数を 27-28 頁としている（山名 1972：62）。しかし、川島哲郎の該当論攷のページは 59-114 頁である。他の論攷のページ数を誤って引用している。
- *33—この点に関しては、本稿では十分に論を展開できなかった。中島健一に多大の影響を与えた、ウィットフォールの著作を分析した中で論じたことがあるので、参照されたい（田畑 2012：130(5)-117(18)）。

引用文献

- 石井知章（2008）『K・A・ウィットフォールの東洋的社会論』、新評論。
- Wittfogel, K. A. (1929) Geopolitik, geographischer Materialismus und Marxismus. in *Unter dem Banner der Marxismus*, 3-1, 4, 5. 川西正鑑補訳（1933）『地理学批判』有恒社 なお本抄訳として坂

- 田吉雄 (1930) ウィットフォージェル「風土政治学・地理的唯物論並びにマルクス主義」, 『思想』, 97, 752-764.
- Wittfogel, K. A. (1956) *The Hydraulic Civilization*. in William L. Thomas ed., *Man's Role in Changing the Face of Earth Vol. I: An International Symposium under the Cochairmanship of Carl O. Sauer, Marston Bates, Lewis Mumford*. The Univ. of Chicago Press, 152-164. 中島健一訳 (1977) 「K. A. Von ウィットフォージェルの「治水文明論」」, 中島健一『河川文明の生態史観』, 校倉書房, 205-227.
- Wittfogel, K. A. (1957) *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, Yale Univ. Press, New Haven. 湯浅起男訳 (1995) 『新装普及版 オリエント・デスポティズム』, 新評論.
- 上野登 (1968) 『経済地理学への道標』, 大明堂.
- 岡田俊裕 (1992) 『近現代日本地理学思想史—個人的研究—』, 古今書院.
- 岡田俊裕 (2002) 『地理学史—人物と論争—』, 古今書院.
- 小原敬士 (1950) 『社会地理学の基礎理論』, 古今書院.
- 小原敬士 (1965) 『近代資本主義の地理学』, 大明堂.
- 鴨沢巖 (1960) 『経済地理学ノート』, 法政大学出版会.
- 川西正鑑 (1935) 『経済地理学方法論』, 時潮社.
- 川島哲郎 (1952) 「自然的生産諸力について—ウィットフォージェル批判によせて—」, 『経済学年報 第2集』, 59-114.
- 京都大学地理学教室編 (2008) 『地理学京都の百年 付補遺』, ナカニシヤ出版.
- 小林新 (1960) 『経済地理学方法』, 日本評論新社.
- 柴田陽一 (2006) 「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立—個人史的側面に注目して—」, 『人文地理』, 55-1, 1-19.
- 清水多吉 (1977) 『一九三〇年代の光と影—フランクフルト学派研究—』, 河出書房新社.
- 田畑久夫 (2008) 「リュシアン・フェーヴル (Febvre, L.) の地理認識—『大地と人類の進化—歴史への地理学的序論』を中心に—」, 『日本文化史研究』 39, 135-155.
- 田畑久夫 (2011, 2012) 「ウィットフォージェルの地理認識 (上)・(下) —『地理学批判』を中心に—」, 『昭和女子大学文化史研究』, 14, 15, 14, 94(1)-77(18), 15, 134(1)-107(28).
- 田畑久夫 (2014) 「鳥居龍藏の歴史認識—『有史以前の日本』改訂版の分析を通して—」, 『昭和女子大学文化史研究』, 17, 150(1)-113(38).
- 田畑久夫 (2016a) 「ウィットフォージェルの水力社会論—中国を事例として—」, 『昭和女子大学生活機構研究科紀要』, 25, 1-20.
- 田畑久夫 (2016b) 「ウィットフォージェルの自然認識」, 『昭和女子大学文化史研究』, 19, 8-36.
- 柘植秀臣 (1979) 『東亜研究所と私—戦中知識人の証言—』, 勁草書房.
- 中島健一 (1942) 『英国史への地理学的序考』, 伊藤書店.
- 中島健一 (1949) 『地理学』(唯物論全書), 校倉書院.
- 中島健一 (1954) 「歴史地理学の方法論」, 『経済地理学年報 1』. 中島健一 (1961) 7-33.
- 中島健一 (1961) 『稲作社会の発展構造』, 校倉書院.
- 中島健一 (1973) 『古代オリエント文明の発展と衰退』, 校倉書房.
- 中島健一 (1977) 『河川文明の生態史観』, 校倉書房.
- 中島健一 (1983) 『灌漑農法と社会—政治体制』, 校倉書房.
- 中生勝美 (1997) 「民族研究所の組織と活動—戦争中の日本民族学」, 『民族学研究』 62-1, 47-65.
- 西村嵩夫 (1980) 『社会科学としての地理学』, 思想の科学社.
- 野間三郎, 堀川侃 (1955) 「環境論」, 辻村太郎編『新地理学講座・第2巻 地理学本質論』, 朝倉書店, 168-208.
- Horkeimer, M., Adorno, T. U. (1947) *Dialektik der Aufklärung, Philosophischer Fragmente*, Querido Verlag, Ameterdan. 徳永恂訳 (2007) 『啓蒙の弁証法—哲学的断層—』, 岩波書店 (岩波文庫).
- Paul Vidal de la Blache (1922) *Principes de Géographie Humaine, Publiés d'après les manuscrits de l'Auteur par Emmanuel de Martonne*, Armand Colin, Paris. 飯塚浩二訳 (1940, 改訳 1970) 『人文地理学原論 上・下巻』, 岩波書店 (岩波文庫).
- 山口貞夫 (1943) 『日本を中心とせる輓近地理学発達史』, 済美堂.
- 山名伸作 (1972) 『経済地理学』(マルクス経済学全集

13), 同文館.

湯浅起男 (2007) 『「東洋的専制主義論」の今日性一還

ってきたウィットフォーゲル』, 新評論.

渡辺光 (1977) 『地理学概論』, 朝倉書店.

(たばた ひさお 生活機構学専攻 教授)

受理年月日 平成 28 年 9 月 29 日

審査終了日 平成 28 年 11 月 30 日